『福生市史資料編』近世2・3を読んで

木藤祐子

近年多摩地域の歴史に多くの関心が集まっているのは衆知のことである。特に、地方史研究協議会の第四一回大会（一九九〇年）が「多摩大会」と称し東京都八王子市で開催され、その大会成果が『「開発」と地域民衆』（一九九一年、雄山閣）として公けにされたのは耳目に新しいところである。

近年あいついで刊行された『福生市史資料編』近世1～3は、当該地域の中心的地位をしめる同市の膨大な史料を集積した貴重な成果である。既に、近世1に関しては馬場憲一氏が『みずくらいど』9号（一九八九年）に「福生市史資料編（近世1）の内容と特色」と題して紹介されているので、ここでは近世2、3（一九九〇、九一年刊）に関して述べていきたい。

本書の全体の構成は以下の通りである。

近世2

第五章　土地と開発

第一節　検地

第二節　越石

第三節　新田開発

第四節　境界

第六章　年貢と取立

第一節　年貢割付と皆済

第二節　地頭先納金

第三節　願書・触書

第七章　御用諸役

第一節　御用鮎

第二節　鷹場

第三節　助郷

解　題

付録　福生村文左衛門組貢租変遷表

近世3

第八章　普請と用水
第一節　玉川上水
第二節　多摩川
第三節　橋と用水
第九章　産業
第一節　養蚕・製糸
第二節　酒造
第三節　農間商・職
第四節　書簡
第十章　寺社と文化
第一節　寺社・宗教
第二節　教育・文化
第十一章　兵事
第一節　農兵
第二節　千人同心
第十二章　貯穀と救恤
第一節　貯穀・夫食
第二節　災害
第三節　地頭所貸付金上納

解　題

以上、近世1（第四章まで）に続き、全八章二四節に各項目に従い史料が収録されている。また、各節にはそれぞれの項目に対しての解説が記されており、また、巻末には解題（北原進氏）が載せられており利用者の便がはかられている。

近世2の第五章第一節では幕藩体制社会の政治的、経済的基盤である土地と農村に関する領主の把握を示す根本史料である検地帳が、第二節では福生村が隣村川崎村に所有していた越石＝飛地に関する史料が収録されている。特に越石については享保九年（一七二四）の越石地の年貢取立てをめぐる福生村と川崎村の争論に関する史料が収録されており興味深い。第三節においては一七世紀中頃から始まる武蔵野新田開発に関する史料が、第四節では近世初頭から数多く見られる多摩川氾濫にともなう境界の争論に関する史料が豊富に収録されている。河川氾濫による農民のあえぎ、自村の荒廃にのぞむ農民の声がここにはよくあらわれている。

第六章第一節では幕藩領主の財政基盤である年貢に関する史料を収録している。同節の解説に述べられているが、現福生市市域である福生村、熊川村には享保期以降幕末までほぼ連年にわたって、割付状・皆済目録がよく残っているそうで、ここでは、享保・寛政・天保期といった変革期

前後の史料が紹介されている。また、第二節では旗本財政に関する史料、地頭先納金（年貢金の前借り）について一節を設け収録されている。このことからも分かるように、近世中期以降は旗本財政の窮乏も顕著となり、返済証文が見当たらないということから、返済されることはなかったようである。第三節では農民が年貢減免措置を願う願書と、領主が年貢増徴を企図した触書が収録されている。なお本章の資料と密接に関連した「幕府領村落の貢租変遷表—武州多摩郡熊川村・福生村の年貢」（立正大学『経済学季報』39—二、一九八九年九月刊）が、本資料集の編集スタッフにより公けにされている。ページ数の関係で本章に収められなかった年貢割付状・皆済目録を、詳細な一覧表にしたものであり、参照をおすすめする。

第七章一節では玉川付き村落である福生村・熊川村の特色といえる御用鮎に関する史料が多数収録されている。農間余業の一つとはいえ江戸という大消費地をひかえた同地では、重要な商品であり、さらに将軍の御菜鮎として上納されていたことから考えても貴重な史料といえる。第二節ではこれも同地域の特色の一つである尾張藩御鷹場に関する史料が掲載されている。近年、鷹場に関する研究史がさらに蓄積されていることから考えても、同市域の鷹場関係史料が公刊されたことは今後の鷹場研究の発展に大きく寄与するものと思われる。第三節では村々の負担の大きなものの一つである助郷に関する史料が収録されている。福生・熊川両村は共に玉川御普請所、御菜鮎上納御用役等の重役を理由に免除されている。

次に、近世3、第八章第一節では江戸市中への給水目的で設置された玉川上水について、福生・熊川村両村が負った役負担に関して多くの史料が載せられている。また、天保一三年（一八四二）写の「玉川上水路絵図」が収録されており興味深い。第二節では多摩川と福生・熊川両村の関係に関して、川除普請関係の史料を中心として収録されている。第三節では玉川上水・多摩川にかかる橋の修復や掛け替えに関する様々な史料、さらに農業用水に関する争論関係史料等が載せられている。

第九章では当該地域の産業に関する史料が収録されている。まず第一節では農間渡世として、さらに幕末においては重要な輸出品目として重視された養蚕・製糸に関する史料が載せられている。多摩地域は、養蚕・製糸の先進地である信州や上野と開港場である横浜とを結ぶ土地柄からか、養蚕業の発展とそれに伴う販売競争激化による混乱が見られ、これに対する触書等が多く収録されている。第二節では福生市を代表する地場産業酒造に関する史料が豊富に収録されている。第三節では農間渡世に関する史料が収録されており、醤油醸造や油絞り、古着・荒物等の商業に従事するもの等、多数の農間渡世があったことが判明する。第

四節は伊豆韮山代官江川家に仕えた柏木総蔵（一八二四～一八七八）より、当時多摩地方屈指の実業家であった田村半十郎（福生村）にあてた史料を収録している。これは江川家関係地域における殖産振興のため、田村の持っていた多様な経験と知識の協力を要望したもので、田村もこれにこたえたようである。

第十章第一節では当該地域における寺社・宗教に関する史料が収録されている。福生市における寺社関係の史料は、既に『福生市資料編』中世・寺社編にも収められているのでここではそれ以外の史料が収録されている。第二節は教育・文化に関する史料が収められているが、既に刊行されている資料もあるのでこれも重複をさけて収録されている。ここには当時の富裕な農民等による道中記、あるいは医療、薬種の調合、種痘等様々な史料が載せられている。道中記に書かれている細かな賃銭、風物等は、当時の各地の様子を垣間見せてくれる。また、流行病に対する治療法や、種痘の伝授も興味深い。

第十一章第一節では幕末の対外的危機あるいは幕藩領主層の危機意識を反映した農兵取り立てに関する史料が収録されている。特に多摩地域は江戸に近いということもあり、また農兵取り立ての建議をするなど推進的役割を担った江川代官の管轄化であったことからも史料が豊富である。第二節は幕府の関東支配の要地である多摩地域に置かれた八王子千人同心に関する史料である。ここには同心株の売買や軍備の状況、あるいは千人同心の由緒書等が収められている。

第十二章には近世福生市域を襲った災害や、それに対する幕府代官の対応に関する史料が収められている。この二つは特に関連するもので、飢饉や旱魃、台風や出水といった自然災害による農民の苦難、そういった社会的状況によって発生する打ち壊しや一揆の予防措置としての備荒貯蓄制度に関して多くの史料が載せられている。また、第三節には「史料編近世2」第六章第二節地頭先納金に関連する旗本田沢氏の財政史料が収められている。

以上、「史料編近世2・3」の内容を各節ごとに簡単に述べてきた。ここに見られるように、『福生市史資料編』近世1・2・3は膨大な同市域関係史料を、各節ごとに適切に分類し、さらに利用者の便を図るための細かな解説を付し発刊された。これは近世史を専門に研究する者だけでなく、多くの人々が同市の歴史を史料から学ぶことができるための、関係各位の配慮と思う。

冒頭でも述べたが、近年多摩地域の歴史に多くの人々の関心が向いている。関連自治体においても自治体史編纂の動きが活発で、多くの成果を見ることができる。こうした中で『福生市史資料編』近世1・2・3の刊行も、たいへん意義深い成果であると位置づけられる。またページ数の

制約から本資料集に掲載されていない関係資料が、数多く写真版として市史編纂室に保管されているそうだが、これらもふくめて今後、研究者だけでなく興味をもつ人々が利用しやすいような状況が、より一層すすんでいくことを期待している。

末尾ながら、本資料編刊行に尽力された北原進先生及び関係者の方々に敬意を表したい。

（きとう・ゆうこ　法政大学大学院　板橋区在住）